

令和2年度第1回三重県教育改革推進会議の概要

- 1 開催日 令和2年8月19日(水) 14時00分～16時00分
- 2 会場 教育委員室(オンライン)
- 3 概要

＜新たな時代における本県の高校教育のあり方について＞

- 新型コロナウイルス感染症の影響により、地域の優位性が高まることを想定して検討することが必要ではないか。
- 国が進めている今後の普通科の在り方の方向性については理解できる。専門高校の在り方については、サービスの提供者は最終消費者であるということを念頭に置くと、農業、工業といった枠組みを越えて協働する取組が大切になってくる。学校間連携にあたっては、国が本格運用を目指すSINET(サイネット)が導入されることにより、ICTを活用した学びの連携をストレスなく進めることができる。まずは、専門高校を優先してモデルケースをつくってみてはどうか。
- コミュニティスクールの導入は学校運営にも関わる業務もあることから、学校支援地域本部事業よりもハードルが高い。高校で導入する際には、両者の住み分けを明確にすることが大切である。
また、高校は、「地域」が広域となるので複数の中学校区を「地域」として、学校支援地域本部事業やコミュニティスクールの導入を進めてはどうか。その際、高校でも、すでに地域と連携している中学校との連携を進めるとよいのではないか。
- 小学生を対象にオンライン学習について調査したところ、自立的に学習に取り組める児童にとっては効果的だが、そのような学習習慣が確立していない児童にとっては、オンラインによる学習は難しいという結果が出たことから、高校での推進にあたってはこういった生徒への対策が必要である。
別の調査では、勉強が好きではないと回答した生徒は将来の目標を持ちにくいという傾向が見られたことから、こういった生徒に将来の目標を考えさせることが大切である。その際、「クラスに愛着を持っていること」「保護者の働きかけ」が将来の目標の明確化に繋がるという結果が参考となる。
- 将来の目標を明確にするためには、生徒同士の学び合いや職場体験などの積み重ねが大切であることから、ICTの活用も進めつつ、学校で集う状況での学びも大切にすることが必要である。

- 人との関わりが苦手な生徒は、対話型の授業は苦手で、逆に、コロナ禍で進展したオンライン学習を好む生徒もいる。今後は、自分に応じたスタイルの授業を選択できるようにすることも必要である。
また、コロナ禍の影響で、対人関係の構築の機会が乏しくなったことから、例年以上に新高校1年生の不登校生徒が増えたと実感している。
- 県南部においては、通える範囲にある県立高校が限られているため、学校の選択の幅が極端に少ない。小規模化が進む中、地域の高校の存続について心配している。
- 高校に入学することが目標となっており、そのため入試が終われば勉強への意欲を失ってしまう生徒もいるため、将来の目標をより明確に持てるよう、高校に入る前に職場体験などの経験をすることが、高校入学後の学習意欲の向上につながるのではないかと。
- 地域においては、看護・介護人材が不可欠であるが、大都市圏の高齢化に伴い、賃金の高い都市部への流出が進むことが想定される。南部地域の生徒が通学することができる高校に看護・介護等の専攻科があれば、地域に必要な人材の確保に繋がる。
- それぞれの地域でどのような教育を行い、そのためにどのような学校づくりが求められているのかを示すことにより、任された校長も5年先・10年先の展望を持ちながら学校経営に取り組めるのではないかと。